

あなたは「何人称の視点」で医療をしていますか？

伊藤 孝史*

大学病院で勤務していると、臨床・研究はもちろんですが、学生の指導に多くの時間を費やします。初めて腎臓内科の病棟実習に回ってくる学生たちに、腎臓病学の楽しさを教える前に、患者との接し方について話します。

最近、多くの病院で電子カルテが導入されています。患者の情報をパソコンの画面で見ることができて、あたかもそこに患者がいるかのように思ってしまう、そこですべてを済ませてしまいそうになります。しかし、医療の原点は「ベッドサイドに行くこと」です。足繁くベッドサイドに行くことにより、患者との信頼関係が生まれてくるのだと思います。ですから学生には、最低でも1日3回はベッドサイドに行くように指示しています。「おはようございます。昨晚は眠れましたか？」「こんにちは、今日の検査お疲れ様でした」「今日も1日ありがとうございました。また明日もよろしくお願いします」と声をかけることで、コミュニケーションが進みます。病棟回診の際に、患者の皆さんに学生が1日何回来ているか、しっかり話ができているかを尋ねます。「今日は検査があったので、2回しか会えてないけど、いつも最低3回は来てくれるよ。色々話ができ、元気をもらえています」「いつか診てもらおうかもしれないから、頑張ってね。協力するよ！」そういう言葉を聞くと嬉しくなります。学生たちからも「病気で入院してしんどいの、学生実習をさせていただいて、ありがたいです」「ベッドサイドに行って、しっかり話をするこ

* 島根大学医学部附属病院腎臓内科

との大切さがわかりました」という言葉を聞くようになりました。

私は学生たちに「患者さんが、自分の祖父母だったら、両親だったら、兄弟だったら、子供だったら（学生に子供がいる人はそうはいませんが）、医師・学生にどんな風に接してほしい？」と聞きます。みんな真剣に考えます。もちろん、「親身になって診てほしい」という答えが圧倒的ですが、実際にはどうでしょう。患者は基本的には、一人称（自分自身）でも、二人称（家族などの身近な人）でもなく、三人称（他人）です。しかし、一・二人称の視点で情愛をもって接することと、三人称の視点で冷静に接することを癒合させ、「2.5 人称の視点」で接してほしいと話しています。そうです、柳田邦男氏が提唱されている「2.5 人称の視点」。そういう視点をもった医師になりたいと思いますし、そういう医師を育てていきたいと思う今日の頃です。

そうそう、病院で一緒に働いている他職種の方たちとのコミュニケーションも忘れずに！ さあ、ベッドサイドに行ってこよう……。